

たき火

国木田独歩

青空文庫

北風を背になし、枯草白き砂山の岨がけに腰かけ、足なげいだして、伊豆連山のかなたに沈む夕日の薄き光を見送りつ、沖おきより帰る父の舟ふね遅しとまつ逗ず子あたりの童わらべの心、その淋さびしさ、うら悲しさは如何あるべき。

御最後川の岸边に茂る葦あしの枯れて、吹く潮風に騒ぐ、その根かたには夜半よわの満みち汐しおに人知れず結びし氷、朝ひきの退しお潮に破られて残り、ひねもす解けもえせず、夕闇に白き線を水みぎわに引く。もし旅人、疲れし足をこのほとりに停とめしとき、何なに心こころなく見廻わして、何らの感もなく行過ぎうべきか。見かえればかしこなるは哀れを今も、七百年の後にひく六代御前ろくだいごぜんの杜もりなり。木こがらし

その梢こずえに鳴りつ。

落葉を浮かべて、ゆるやかに流るるこの沼川ぬまかわを、漕こぎ上のぼる舟、知らずいずれの時か心地こころちよき追お分いわけの節ふしおもしろくこの舟より響きわたりて霜夜の前ぶれをか為なしつる。あらず、あらず、ただ見るいつもいつも、物いわぬ、笑わざる、歌わざる漢子おのこの、農夫とも漁人とも見分けがたきが淋しげに櫓ろあやつるのみ。

鍬くわかたげし農夫の影の、橋とともに臙おぼろにこれに映うつる、かの舟、音もなくこれを搔かき乱しゆく、見る間に、舟は葦がくれ去るなり。

日影なおあぶずりの端はに躡たゆたうころ、川口の浅瀬を村の若者二人、はだか馬またがに跨またがりて静かに歩あゆます、画めきたるを見ることも

あり。かかる時浜には見わたすかぎり、人らしきものの影なく、ひき上げし舟の舳へさぎに止まれる鳥からすの、声をも立てて翼打はうちものうげに鎌倉のほうさして飛びゆく。

ある年の十二月末つ方、年は迫れども童わらべはいつも気楽なる風の子、十三歳を頭かしらに、九ツまでくらいが七八人、砂山の麓ふもとに集まりて何事をか評議まぢまぢ、立てるもあり、砂に肱ひじを埋めて頬杖ほおづえつけるもあり。坐れるもあり。この時日は西に入りぬ。

評議の事定まりけん、童らは思い思いに波打ぎわを駈けめぐりはじめぬ。入江の端はしより端へと、おのがじし、見るが間に分わかれ散れり。潮遠うしおく引きさりしあとに残るは朽くちたる板、縁欠ふちけたる椀わん、竹きれの片、木の片、柄の折れし柄杓ひしゃくなどのいろいろ、皆な一昨日おととい

の夜の荒あれの名残なごりなるべし。童らはいちいちこれらを拾いあつめぬ。集めてこれを水ぎわを去るほどよき処、乾ける砂を撰えらびて積みたり。つみし物はことごとく濡うるいたり。

この寒き夕まぐれ、童らは何事を始めたるぞ。日の西に入りてよりほど経へたり。箱根足柄あしがらの上を包むと見えし雲は黄こが金色ねいろにそまりぬ。小坪こつぼの浦うらに帰る漁船の、風落ちて陸近ければにや、帆ほを下ろし漕こぎゆくもあり。

がらす砕け失せし鏡の、額がくぶち縁えりめきたるを拾いて、これを焼くは惜しき心地すという児この丸顔、色黒けれど愛らし。されどそはかならずよく燃ゆとこの群の年かさなる子、己おのが力にあまるほどの太き丸太を置きつついえり。その丸太は燃えじと丸顔の子い

う。いな燃やさでおくべきと年上の子いきまきて立ちぬ。かたわらに一人、今日は獲もののいつになく多きようなりと、喜ばしげに叫びぬ。

わらべらの願いはこれらの獲物えものを燃やさんことなり。赤き炎ほのおは彼らの狂喜なり。走りてこれを躍り越えんことは互いの誇りなり。されば彼らこのたびは砂山のかなたより、枯草たぐの類を集めきたりぬ。年上の子、先に立ちてこれらに火をうつせば、童らは丸く火を取りまきて立ち、竹の節の破るる音を今か今かと待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えては消えぬ。煙のみいたずらにたちのぼりて木にも竹にも火はたやすく燃えつかず。鏡のわくはわずかに焦こげ、丸太の端よりは怪しげなる音して湯気を吹けり。童ら

はかわるがわる砂に頭押しつけ、口を尖らして吹けどあいにくに煙眼に入りて皆の顔は泣きたらんごとし。

沖おきははや暗うなれり。江の島の影も見わけがたくなりぬ。干潟ひがたを鳴きつれて飛ぶ千鳥の声のみ聞こえてかなたこなた、ものさびしく、その姿見えずとみれば、夕闇に白きものはそれなり。あわただしく飛びゆくは嶋しぎ、かの葦間あしまよりや立ちけん。

この時、一人の童たちまち叫びていいけるは、見よや、見よや、伊豆の山の火はや見えそめたり、いかなればわれらが火は燃えざるぞと。童らは斉ひとしく立ちあがりて沖かたの方をうちまもりぬ。げに相模湾さがみわんを隔へだてて、一点二点の火、鬼火おにびかと怪しまるるばかり、明滅し、動揺せり。これまさしく伊豆の山人やまびと、野火を放ちしな

り。冬の旅人の日暮れて途遠きを思う時、遙かに望みて泣くはげにこの火なり。

伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆと、童ら節おもしろく唄い、沖の方のみ見やりて手を拍ち、躍り狂えり。あわれこの罪なき声、かわたれ時の淋びしき浜に響きわたりぬ。私語くごとき波音、入江の南の端より白き線立て、走りきたり、これに和したり。潮は満ちそめぬ。

この寒き日暮にいつまでか浜に遊ぶぞと呼ぶ声、砂山のかなたより聞こえぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、この声を聞くものなかりき。帰らずや、帰らずやと二声三声、引続きて聞こえけるに、一人の幼なき児、聞きつけて、母呼びたまえり、もは

やうち捨て帰らんといい、たちまちかなたに走りゆけば、残りの童らまた、さなり、さなりと叫びつ、競うて砂山に駈けのぼりぬ。火の燃えつかざるを口惜くやしく思い、かの年かさなる童のみは、後振りかえりつつ馳せゆきけるが、砂山の頂いただきに立ちて、まさになたに走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼まなこを射たるは火なり。こはいかに、われらの火燃えつきぬと叫べば、童ら驚ろき怪しみ、たち返えりて砂山の頂に集まり、一列に並びてこなたを見下ろしぬ。

げに今まで燃えつかざりし拾木ひろいぎの、たちまち風に誘われて火を起こし、濃き煙うずまき上のぼり、紅くれないの炎の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂わるる音聞こえ火の子舞い立ちぬ。火はまさしく燃えつき

たり。されど童らはもはやこの火に還かえることをせず、ただ喜ばしげに手を拍ち、高く歓声を放ちて、いつせいに砂山の麓ふもとなる家路のほうへ馳はせ下りけり。

今は海暮れ浜も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。この淋しき逗子の浜に、主あるじなき火はさびしく燃えつ。

たちまち見る、水ぎわをたどりて、火の方かたへと近づきくる黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて浜に出いで、浜づたいに小坪街道へと志こころざしぬるなり。火を目がけて小走りに歩むその足音重し。

噎しわがれし声にて、よき火やかすかに叫びつ、杖なげ捨てていそがしく背の小包を下ろし、両りょうの手をまず炎の上にかざしぬ。その

手は震い、その膝ひざはわななきたり。げに寒き夜かな、いう齒の根も合わぬがごとし。炎は赤くその顔を照らしぬ。皺しわの深さよ。まなこ眼いたく凹くぼみ、その光は濁りて鈍にぶし。

頭髮も髻ひげも胡麻白ごましろにて塵ちりにまみれ、鼻の先のみ赤く、頬ほおは土色せり。哀れいづくの誰ぞや、指さしてゆくさきはいづくぞ、行衛定ゆくえめぬ旅なるかも。

げに寒き夜かな。独ひとりごちし時、総そうしん身を心ありげに震いぬ。

かくて温まりし掌もて心地よげに顔を摩すりたり。いたく古びてところどころ古綿ふるわたの現われし衣の、火に近き裾すそのあたりより湯氣を放つは、朝の雨に霑うるおいて、なお乾ほすことだに得えざりしなるべし。

あな心地よき火や。いいつつ投げやりし杖を拾いて、これを力

に片足を揚げ火の上にかざしぬ。脚絆きやはんも足袋たびも、紺の色あせ、のみならず血色ちいろなき小指現われぬ。一いっせい声高く竹の裂わるる音して、勢いよく燃え上がりし炎は足を焦がさんとす、されど翁おきなは足を引かざりき。

げに心地よき火や、たが燃やしつる火ぞ、かたじけなし。いいさして足を替かえつ。十とせの昔、楽しき炉いろり見捨てぬるよりこのかた、いまだこのようなるうれしき火に遇あわざりき。いいつつ火の奥を見つむる目まなざしは遠きものを眺むるごとし。火の奥には過ぎし昔いろりの火、昔のままに描かれやしつらん。鮮やかに現わるるものは児にや孫にや。

昔の火は楽しく、今の火は悲し、あらず、あらず、昔は昔、今

は今、心地よきこの火や。いう声は震いぬ。荒ら荒らしく杖を投げやりつ。火を背になし、沖の方かたを前にして立ち体たいをそらせ、両こぶしの拳こぶしもて腰をたたきたり。仰ぎ見る大ぞら、晴に晴れて、黒澄くろすみ、星河霜せいかしもをつつみて、遠く伊豆の岬角こしかくに垂れたり。

身うちあたた煖かかくなりまさりゆき、ひじたる衣の裾すそも袖そでも乾きぬ。

ああこの火、誰たが燃やしつる火ぞ、誰たがためにとて、誰たれが燃やしつるぞ。今や翁の心は感謝の情にみたされつ、老の眼まなこは涙ぐみたり。風なく波なく、さしくる潮うしおの、しみじみと砂ひたを浸す音を翁まなこは眼閉じて聴きぬ。さすらう旅の憂うきもこの刹那せつなにや忘れはてけん、翁が心、今ひとたび童の昔にかえりぬ。

あわれこの火、ようように消えなんとす。竹も燃えつき、板も

燃えつきぬ。かの太き丸太のみはなおよく燃えたり。されど翁はもはやこれを惜しおとも思わざりき。ただ立去りぎわに名残惜しくてや、両手もて輪をつくり、抱いだくように胸のあたりまで火の上にかざしつ、眼しばだたきてありしが、いざとばかり腰うちのぼし、ふたあしみあし二足三足ゆかんとして立ちかえれり、燃えのこりたる木の端はしば々を搔かきあつ集めて火に加えつ、勢いよく燃え上がるを見て心地よげにうち笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅くれないの光を放ちて、寂じやくばく 寞たる夜の闇のうちにおぼつかなく燃えたり。夜更け、潮みち、童らが焼たきし火も旅とこしえの翁が足跡も永久の波に消されぬ。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集12 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月7日初版

1972（昭和47）年9月10日9版

底本の親本：「国木田独歩全集」学習研究社

入力：j.utiyaana

校正：八巻美恵

1998年10月29日公開

2004年6月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たき火

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>